

【特集】移民とことば—ブラジル日系人と日本語教育を例に—**【日系コロニアの日本語教育の現在：何を継承するか？】****日系コミュニティの核としての日本語学校****—コロニア・ピニャール日本語モデル校—****松本 絵美****要 旨**

移住 110 年の歴史があり、日系人の存在を強く感じるブラジルだが、日系人の同化が進み、日本語、日系コミュニティの保持が難しくなってきている。とはいえ、少数ではあるものの今も尚、日本語を通してコミュニティが成り立ち、生活の中で日本語が使われる場所がある。

では、どのような日本語教育環境下でどのような日本語保持が行われているのかを、コロニア・ピニャールの地域の歴史、日本語学校の成り立ち、日本語学校の実践内容、学習者の意識調査より、考察していく。

キーワード

日系移住地 日本語教育

1. はじめに**1.1 本稿の目的**

日系移住地であるコロニア・ピニャールを調査対象とし、本特集の課題である 2 つの問いに答える形で本稿を進めていきたい。一つ目の問いは「移民にとって、母語はどのようなものなのか、それは世代を超えて、どのように継承されたのか」、二つ目の問いは「移動する個人にとって、国家、民族、言語、故郷とはどのような意味をもつか」である。「日本語学校が日系のコミュニティの核となっている」という筆者の考えを中心に、コロニア・ピニャールの歴史、および現在の日本語教育の方法論と、アンケート、インタビュー調査により、この問いについて回答したい。

なお、ブラジルは広大な地域であるため、当然、多様な日本語教育実践法があり、また、学習者においても、幼児から高齢者まで日本語を学ぶ目的や背景、環境は様々である。本

稿ではブラジル全土での日本語教育の課題点や論点の洗い出しというより、ブラジルの中でも日本人村における日本語環境を基に意見を述べる。

1.2 筆者とコロニア・ピニャールを取り上げる意義について

本論に入る前に、筆者とコロニア・ピニャールを取り上げる意義について述べておく。

コロニア・ピニャールでは、コロニア・ピニャール文化体育協会という組織が地域を運営している。最初の移住者から約 55 年が過ぎたが、鳥居があり、日本行事があり、日本食があり、日本語を学ぶ場があるここは立派な「日本人村」だ。現在の日系コミュニティの問題として、若年層の流出、少子高齢化、人口減少、日本語能力の低下が挙げられているが、2018 年度現在でも、日本語学校の生徒が卒業する 17 歳には日本語能力試験 1 級、2 級を取得するほど高い日本語レベルを保持し、地域では老若男女がポルトガル語と日本語の両方でコミュニティを成立させている。以上のように、コロニア・ピニャールは日本移民の文化を十分に残しつつも変化の中にあり、本稿のテーマに大きな示唆に富んだ場所と考える。

筆者は国際協力機構（以後 JICA）日系社会青年ボランティア（現日系社会青年海外協力隊）として 2015 年 7 月～2018 年 7 月にブラジルのコロニア・ピニャールで活動した。主に、日本語学校で日本語教師として教壇に立ちながら、学校運営、地域行事への企画・運営・参加を行っていた。本論は移住地で暮らしてきた者の目線から伝えたい。



図 1・2 2016 年撮影 コロニア・ピニャール日本語モデル校外観／教室風景

2. コロニア・ピニャールについて

2 章ではコロニア・ピニャールの地区、日本語教育の歴史について述べる。

2.1 地区の歴史

コロニア・ピニャールは日本人が住む小さな移住地である。買い物へ行くにも車で 20 分かかるため、住民は自分たちの集落を「村」と呼んでいる。

1962 年、JAMIC（現 JICA）と福井県の移住事業の一環として、ブラジル移住が進めら

れた。1962 年以降、移住者は増え続け 70 年代には 50 戸余りとなり、それぞれの家族が結婚や出産により、移住地の人口は増加した。

入植当時、土地は荒れ、生活は厳しく、持ち家もなく、電気・井戸は通っておらず、松の木（Pinhãl）を倒し、荒地を耕す日々だったそう。「鍬で大地を引っ掻けばお金が入る」と言われ夢を見た青年も、裏切られた気持ちが大きかったと語る。日用品、食材を購入するにも、17 km 離れている隣町まで歩いて行ったり、運送用のトラックに乗せてもらっていた。幸いにも、年間平均雨量 1,150mm、平均気温 18.5℃と恵まれた自然環境にあったため、トマトやブドウが実り、徐々に生活が安定し始めた。

しかし、村の中では大学も仕事も無く、どんどん町へ出ていく若者が増えた。また、1990 年代には出稼ぎのため多くの若者が日本へ旅立った。以後、若者の流出は進むばかりで、少子高齢化が問題とされている。



図 3 1964 年撮影 荒地に建てた掘立小屋 山下治家

2.2 日本語教育の歴史

1964 年、入植してから 2 年後に日系子弟の教育が始まった。日本語学校は農作業を行う子どもの休みの時間を利用した。集会所を間借りし、寺子屋式での日本語授業が約 30 年続いた。

日本で生まれ、幼い時に移住し、ブラジルで公教育を受けた人を準二世という。彼らにとって日本語は、家庭内で話される継承語であり母語である。そのため、日常会話や、国語教科書を使った日本語学習で困ることはなかった。しかし、書くことは少なかったので漢字の筆記を苦手とする人が多い。ポルトガル語習得は非常に苦労したそう。

両親が一世または準二世の子どもは二世と呼ばれる。二世になると、産まれた時は家庭内で日本語をよく聞きよく話したが、公立保育園・幼稚園ではポルトガル語の生活となる。成長するにつれ生活言語内の日本語と教科学習やメディアの接点の多さから、ポルトガル語の比重が大きくなっていく。準二世と反対に、二世は日本語ができないと悩んでいたり、ダブルリミテッドである自分を危惧したりする人が多い。日常会話は可能だが、スピーチ

だったり、新聞を読んだりすることは難しい。

1997年になると、JICAの助成金により、サンパウロ南西部の日本語モデル校としてコロニア・ピニャールに立派な日本語学校が設立された。このころすでに、二世、三世は家庭内言語がポルトガル語へと移り始めていた。彼らの祖父母に当たる一世は子どもや孫の日本語保持に対して強い危機感を感じた。当時のJICAボランティアが日本の公立小学校の教職員だったので、日本式の日本語学習を求め、日本の小学校制度を基盤とした学校改革をおこなった。学校教育目標の設定、学習指導目標の設定、学校経営案、学校要覧を作成し、教師、学習者が「何のために日本語を学ぶのか」をはっきりさせた。また、学習を計画的に行うことで日本語レベルの保持を図った。

3. コミュニティの核としての日本語教育とは—実践内容—

3.1 日本語授業の特徴

日本語学校では「日系移住地の子ども」を育成することを重視した。そのためにも、日本語学習だけでなく、子どもが日本の文化や習慣を、体験を通して学び、心身共に健やかに育つことが重要だと、発達に合わせた日本語、日本文化学習を行っている。そして、以下の学校教育目標を基に学校を運営している。

日本移住地としての伝統を守り、日本語の学習を通して、**多文化を理解し、人間性豊かで創造性に富んだ、心も体も健やかな人間**を育てる。日本語学習に関しては、読み書きに偏ることなく、4技能（読む、書く、聞く、話す）のバランスの取れた基本的な日本語のコミュニケーション能力の育成を目指す。

校訓「望み大きく、たくましく」

- 一、夢を持って勉強する子ども
- 二、温かい心を持つ子ども
- 三、心身共に元気な子ども

めざす学校

- 一、学校環境は美しく、きちんと整理され、豊かな情操を育む学校
- 二、教師、子どもが人間的信頼と敬愛に満ちた礼儀正しい学校
- 三、保護者から信頼され、地域の協力を得、確かな教育が行われる学校

（『学校要覧』より抜粋、強調は筆者）

日本語学校はトイレに自分で行ける年齢になる4歳に入学し、卒業する17歳に日本語能力試験二級を目指していく。4歳から6歳までは、はさみやおりがみ、生活習慣、集団行動、あいさつを学習する。そして、徐々に日本語での学校生活に慣れてきた7歳頃より『こどもの日本語』、『中級へいこう』『中級を学ぼう』『上級への扉』などのテキストに沿ってフラッシュカードを使った語彙練習や、パソコンやタブレットを使った作文指導、カメラ撮影を行ってのスピーチ練習など、あらゆる方法での日本語学習の現場を各先生と子ど

もによってつくりあげている。また、金曜日は日本文化に特化した授業が行われる。週によって指導内容は異なるが、音楽、体育、図画工作、調理実習など、日本語や日本文化を題材に行われる。

そして、日々の学習を学校内だけにとどめず、「地域とともに育てる子ども」をテーマに保護者参加型の授業参観や、日本語の上手な村民が審査員となり、校内スピーチ大会、作文コンクールが行われる。また、半年に一度、保護者と先生は、学習者の成績表と今までに作った絵やミニテスト、作文などのポートフォリオとともに二者懇談を行う。どのような日本語授業を行っているか、どのような事ができるようになったか、子どもにどのような日本語を求めているか、学校で何を学ばせたいか、この時にじっくりと話し合う。

子どもは平均して 10 年間日本語学校に通うため生活の一部である。保護者とは時代に合った子どもの教育方法を話し合う必要があり、親の教育方針と学校のできることをすり合わせながら子どもを育てていく方針を取っている。



図 4・5 PC 学習/保護者参加型の授業参観と教室背後のポートフォリオ

3.2 文化行事

コロニア・ピニャールでは学校が子どもをつくり、子どもが地域を活性化させている。そのため、コロニア・ピニャール日本語モデル校では毎月を通して多様な日系行事が行われる。以下が日本語学校の年間行事計画である。

表 1 コロニア・ピニャール日本語モデル校年間行事（強調は筆者）

2 月	大掃除、保護者会／始業式／授業開始
3 月	ひな祭り
4 月	家庭訪問／授業参観／身体測定／デイキャンプ／聖南西和太鼓大会フェスティバル
5 月	子どもの日／母の日／全伯毛筆・絵画・硬筆コンクール 校内 JICA 研修選考会／聖南西地域区域外研修
6 月	聖南西 JICA 研修選考会／全伯作文／アニメコンクール／フェスタ・ジュニーナ
7 月	保護者会／運動会／冬休み／全伯ブラジル和太鼓大会
8 月	大掃除／授業開始／聖南西作文コンクール
9 月	校内お話大会／びわ祭り（収穫祭）／サンパウロ州スピーチコンテスト・弁論大会
10 月	聖南西お話・学習発表会／感謝の日（敬老会）／聖南西和太鼓フェスティバル
11 月	日本祭り／遠足／保護者会／青空スポーツ
12 月	日本語能力試験／卒園式、卒業式、修了式／夏休み／聖南西林間学校
1 月	夏休み／聖南西教師合同研修会

学校だけで完結する行事と学校生徒以外の誰かと交わって行う行事に分割した場合、上表の太字が保護者、村、他学校の日本語学習者とともに行う行事だ。

中でも太鼓部の存在は輝かしい。太鼓部では日系の子どものほとんどが所属し、手のひらに豆ができ、割れた上からまた豆ができるような血と汗握る練習を行い、ブラジル太鼓大会では3度の優勝経験を持つ。コロニア・ピニャールの太鼓部は地域の名をブラジル中にとどろかせた。その結果、村の行事で太鼓をたたけば、他地域からの訪問者が現れる。



図6 2015年撮影 日本祭にて太鼓部発表

4. コミュニティの核としての日本語学校とは？—アンケートより—

3章では、日本語学校に、人づくり、地域づくりをしている機能があるということを述べた。4章では、インタビュー、アンケートにより住民が具体的にどのような人と地域を目指しているのかを明らかにする。

4.1 調査概要

2018年3月～7月に、コロニア・ピニャールにて「日系移住地であるコロニア・ピニャールの日本語学校と移住地についてどのように考えているか」の意識調査を行った。調査方法は、コロニア・ピニャールの中に日系コミュニティの中心的な役割をはたしている40世帯(68名)を対象にインタビューとアンケートの依頼を行った。その結果、アンケートは20名、インタビューが27世帯に行えた。

アンケートでは、計18問による複数選択型のコロニア・ピニャールと日本語学校に対する意識調査を、インタビューでは一世を対象とした個々が知っているコロニア・ピニャールの歴史と過去の写真を時系列に見ながら今までのインタビュー対象者の歩みを、一世帯平均2時間で訪問インタビューを行った。

今回はアンケートの中でも人づくりと地域づくりに限定した設問を取り上げ、実際にコロニアで生きてきた人がどのように感じているのかを書き記したい。

4.2 どのような子どもを目指しているのか

第4章までを参照すると分かるように日本語、日本文化の継承に大きく影響を与えたのが日本語学校の存在である。では、コロニア・ピニャールの地域住民は次世代にどのようなことを継承したいと望んでいるのか、以下の20の選択肢の中から複数回答可の条件のもと、返答してもらった。一人当たりの平均回答は9つである。アンケート結果を分析するにあたり、まず日本語学校が目指している、勉学、心、健康の三つの分野に分けた。

アンケート結果①

問. 子どもまたは、次世代にどのようなことを身に付けてもらいたいですか。

表2 次世代に望むこと

温かい心を持つ子ども (140pt)	やさしさ・おもいやり (16pt)
	礼儀正しさ (16pt)
	コミュニケーション能力 (15pt)
	日本的文化・習慣 (14pt)
	チャレンジ精神 (13pt)
	我慢強さ (12pt)
	協調性 (10pt)
	ボランティア精神 (10pt)
	アイディアを出す力 (8pt)
	日系アイデンティティ (8pt)
	メンバーをまとめる力 (6pt)
	芸術的センス (6pt)
	国際感覚 (6pt)
夢を持って勉強する子ども (56pt)	集中力 (12pt)
	基礎学力 (10pt)
	考える力 (10pt)
	自分の考えを伝える力 (9pt)
	語学力 (8pt)
	ITリテラシー (7pt)
心身ともに元気な子ども (10pt)	体力・運動能力 (10pt)

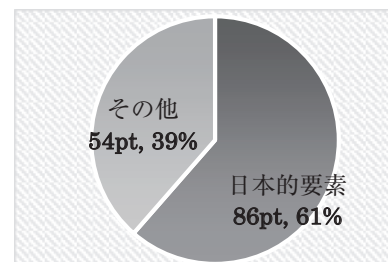


図7 「温かい心を持つ子ども」カテゴリー内の日本的要素(86)とその他(39)

灰色：日本的要素
マーク無し：その他

表2から、次世代には心健やかに育ってほしいという願いがくみ取れる。また、「温かい心を持つ子ども」カテゴリーを詳しく見ると、日本人が美德としていることや日本的な要素の強いものが読み取れる(図7)。日本的要素を灰色にし、その他と区別した場合、全体の6割が日本的要素を含んでいることが分かった。以上の結果より、日系移住地の次世代の人物像に臨む姿は、日本的要素を含む人材である。

4.3 どのような地域を目指しているのか

日本語学校を通して、子どもが育ち、地域の人物として生きていく中で、地域の中で生きていくためには何が必要なのか、どのようなことを目指していくのか、アンケートを取った。以下の14の選択肢の中から複数回答可の条件のもと、返答してもらった。一人当たりの平均回答は4つである。アンケート結果を分析するにあたり、対外的要素、対内的要素、インフラ要素に分類した。対外的要素は、地域活性化のために外部から人を呼び、収

益になる、または、人口が増えることを目的に期待していることである。対内的要素は、地域の中で経済的に安定し、心と体が健康に移住地らしく生活できることを期待している。インフラ要素は、地域住民にとって、生活の基盤となるインフラが整備されることを期待するものである。

アンケート結果②

問. これからのコロニアに期待する事は何ですか。

表3 これからのコロニアに期待する事は何か

対外的:外部の人間をコロニア・ピニャールへ呼び込む (23pt)	新しい名産物の開発 (9pt)
	村の観光課 (6pt)
	公園の開設 (5pt)
	レストランの開設 (3pt)
対内的:内部の人間が生活をより豊かにするために行う (37pt)	大学や専門学校の建設 (4pt)
	新しい名産物の開発 (9pt)
	日本の文化活動の充実 (8pt)
	新しい日本語学校の活用 (7pt)
	健康的なスポーツ活動の充実 (7pt)
インフラ (24pt)	雇用の場所の増加 (6pt)
	医療・福祉サービスの充実 (10pt)
	道路整備 (8pt)
	0歳児から入れる育児施設 (4pt)
	施設老朽化対策 (2pt)

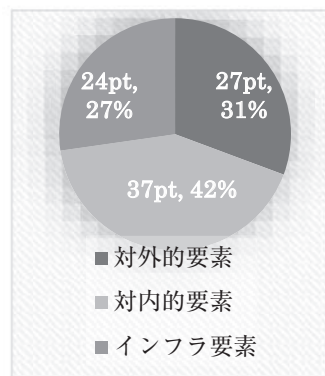


図8 結果の内訳

荒れ地を耕し、生活の基盤を獲得し、日系子弟の教育に力を入れたコロニア・ピニャールは今現在、次のステージへ向かおうとしていることがうかがえる。なぜなら、対外的要素の中で、どのような意図をもって回答したのかインタビューの中で聞いたところ、コロニア・ピニャールには日本の文化、食べ物、習慣が色濃く残っているからこそ、「ブラジルでは珍しい場所であり、日本人村の観光農園として新たな商業になりうるから」と話していたからだ。コロニア・ピニャールの特徴を十分に活かしながら対内外に働きかけ、雇用を増やす方向で若者の町への流出を防ぎ、外部からの訪問客を増やそうと考えている。

コロニア・ピニャールは日本とのつながりの場であり、自分たちが暮らす場所、そして、日本のつながりを活かしてブラジル社会とコロニア・ピニャールをつなげる場でもある。

5. 日系コミュニティの核としての日本語学校

日系コミュニティでは「共に生きる」ことが大前提である。では、共に生きるとはどういうことか。この地域で生きる人として、どのように生活してきたのか、どのような人間を育てるのか、今後どのような展望を抱いているのかをみんなで考え、みんなでつくり上げていくことである。コロニア・ピニャールでは、日本語学校が子どもたちを地域の中の人間としてコミュニティを束ねる役目をしていることが明らかとなった。最後に、本特集の間に返答する形で本稿を終える。

5.1 移民にとって母語はどのようなものか。それは世代を超えてどのように継承されたか

移民にとって母語はブラジルに生きる日本人としてのアイデンティティである。そして、日本語学校を中核として日本語使用の場を意図的につくり上げた。地域とともにつくり上げる日系子弟として、日本語学校内の日本語学習だけでなく、地域参加型の「家族慰安大運動会」などを催すことによって、街へ出ていった若者が年に何度かコロニア・ピニャールへ帰ってくる機会を設けた。例えコロニアから離れた若者でも、日本語学校で学んだ言語、文化、習慣が成長しても尚使われ、その子ども、孫は親とともに訪れたコロニア・ピニャールの地より、日系の洗礼を受ける。自分のルーツとなるものを知り、感じ、学ぶ。日本語は日系人であるというアイデンティティの一つとなり、この地を共につくり上げたという強い帰属性意識より日本語使用の場が今も尚設けられているため、日本語学校を中心に母語の継承が行われていると考える。

5.2 移動する個人にとって、国家、民族、言語、故郷とはどのような意味を持つか

コロニア・ピニャールの人にとって、国家であるブラジルは生きる場所であり、民族は多様であり、故郷は「自分は何者なのか」を考えさせる場所である。

移民にとってブラジルは日本人を受け入れてくれ、これから子どもがブラジルで育っていく場所である。それゆえ、ブラジルに感謝と尊敬の念をもっている。一方の文化をかくくなく排除するのではなく、「日本祭り」と「Festa Junina」の両方の文化的行事を日本語学校主催で開催する。日本に固執し依存するのではなく、また、ブラジル社会に同化するのではなく、日本語学校を通して日本とブラジルの両方の民族性を育んでいる。

日系人にとって日本語は自分が何者なのか、を教えてくれるものであり、祖父母や親の願いや希望の継承物でもある。彼らの生きる土地こそ故郷である。

彼らは、複数の言語、民族性、故郷を持つ、日本とブラジルの隣人であるような貴重な存在であるように思う。

謝辞

本稿の執筆にあたって、コロニア・ピニャール日本語モデル校の西田みどり先生には調査協力など貴重な助言をいただきました。この執筆にご協力いただいたすべての方に感謝します。

参考文献

- 徳久敏行 (2017) 『コロニア・ピニャール日本語モデル校—要覧—』
 西田みどり (2017) 『コロニア・ピニャール文化体育協会—移住地の学校—』 (https://fjisp.org.br/wp-content/uploads/2018/03/Pesquisa_28.pdf)
 コロニア・ピニャール日本語モデル校 (2018) 『コロニア・ピニャール日本語モデル校 HP』 (https://fjisp.org.br/wp-content/uploads/2018/03/Pesquisa_28.pdf)

(まつもと えみ 元コロニア・ピニャール日本語モデル校)